

第三者意見

CSRレポートを詳細に読ませていただき、堅実で分かりやすい報告書であるという印象を受けました。感想として、3点ほど取り上げてみたいと思います。

第1は、白井CSR担当役員が「CSRはコストではなく、投資である」と明言されていることです。この基本路線が存続する限り、THKのCSR活動は意義を増し続けると確信します。投資効果(ROI)を、単に直接的な数値(例えば売上高)のみ評価するのではなく、一般社会の方々が受ける企業イメージのような数値化しにくいリターンも重要であることを、株主のような直接のステークホルダーに理解していただく必要があると思われま

す。第2は、「環境負荷の全体像」で図示されたTHKを中心とする入力・出力のまとめが強く印象に残りました。THKの環境対応のファクトがこの図1枚に集約されていると思います。この図は、国内5工場と4生産拠点に限定されておりますが、海外拠点ではどうなのか、という疑問がまず湧きます。次に、数値の意味です。生産高・廃棄物総排出量・CO₂排出量の数値がそのまま示されていますが、これらが妥当なものかどうか、同種企業内、あるいは、生産業全般、国内・国外企業の現状と比

べて、どうなのかということも知りたくになります。また、その前のページの環境数値目標との関連も説明されるとさらに分かりやすく迫力が増すと思います。

第3は、このような優れたレポートを、直接的なステークホルダーの範囲内に留めておくのはもったいない気がします。我田引水になりますが、最近注目を集めている戦略的システムエンジニアリングは、「木を見て森を見ず」を脱却して、「木も森も見る」という技術アプローチです。技術の詳細を理解せずに全体システムをまとめ上げることは不可能ですが、最近の動向は、とかく経営とかマネジメントが最重要という誤解がまかり通っています。THKは、悪魔の仕業といわれている複雑な境界摩擦の原点から出発し、ころがり摩擦の利点を最大限に生かす製品開発を世に出して成功を収めました。このような地味で原理的にも厄介な問題は、最近の教育研究機関(大学や旧国立研究機関)においては人気のあるテーマとはいえず、教員・学生を含めて研究者は減少傾向にあり、深刻な問題となっております。

本レポートのような優れた報告書を広く世に問い、才能ある若者たちをものづくりの原点に引き戻すことこそ、真のCSRの意義と考える次第です。



慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科
教授 工学博士 狼 嘉彰 様

1939年生まれ。1963年早稲田大学第一工学部応用物理学科卒業(計測制御工学)。1968年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了(工学博士)。科学技術庁航空宇宙技術研究所所長。1974年米国UCLA客員研究員、NASA国際フェロー。1992年東京工業大学工学部機械宇宙学科教授(宇宙工学)。1999年財団法人宇宙開発事業団技術研究本部特任参事・技術総監。2000年慶應義塾大学システムデザイン工学科教授。2008年から現職。1970年、1980年計測自動制御学会学術論文賞受賞。1981年科学技術庁長官賞受賞。日本機械学会論文賞受賞。1997年機械学会創立100周年記念事業功労者表彰。1999年日本機械学会宇宙工学部門功労賞受賞。2000年国際宇宙航行連盟(I A F) J. Breakwellメモリアル賞受賞。

編集後記

昨年に引き続き2回目のCSRレポート発行となりました。昨今、世間のCSRへの関心が高まる中、「本業を通じたCSR」を紹介した特集、THKのコーポレートガバナンス体制やコンプライアンス体制、さらに環境配慮製品の開発や地球温暖化防止への積極的な取り組みも分かりやすくお伝えできるよう努めました。

また、普段はお見せすることのできないTHKの姿をステークホルダーの皆様にお伝えするため、THKと関係のある方々や従業員の声を多く取り入れるよう努めました。お読みいただいた皆様に十分にお伝えできましたでしょうか。

今後は、新たに発足しましたCSRプロジェクトの活動を通じて、全社一丸となった取り組みを行い、皆様にお伝えする情報の質を高めてまいります。

最後に、今回のレポートが読者の皆様にどのように受け取られたのか、ご意見を賜りたく存じます。貴重なご意見は、今後のCSR活動への取り組みやレポート作成の参考にさせていただきます。ご高覧のうえ、忌憚のないご意見・ご感想を同封のアンケート用紙にてお寄せいただければ幸いです。

CSRプロジェクト事務局
(次回発行予定2009年10月)